

グリフィスと橋本左内

ーグリフィス・コレクションの『橋本左内略伝』をめぐってー

高木 不二*

はじめに

1. グリフィスから橋本家への問合せ
2. 橋本綱常氏からグリフィス氏への返信 1
3. 橋本綱常氏からグリフィス氏への返信 2
4. 『橋本左内略伝』和文
5. 『橋本左内略伝』英訳

結びに代えて

はじめに

アメリカニュージャージー州ニューブランズウィックにあるラトガース大学アレクサンダー図書館所蔵のグリフィス・コレクションのなかに、『橋本左内略伝』と題する罫線の入った和紙の原稿用紙に手書きされた橋本左内の伝記と、“A SKETCH OF THE LIFE OF HASHIMOTO SANAI”という英文が収められている。なぜこうした史料が、グリフィス・コレクションに収められているのか疑問に思い、調べてみると『橋本左内先生 生誕百年記念 展覧会記要』の中に「英文『橋本左内略伝』解説」として、その経緯を示す次のような記事があることがわかった。

景岳会小史の稿を了へて、間もなく本会所蔵の篋底に長く埋れていた、英文『橋本左内略伝』を偶々発見したことは、今や先生生誕百年記念展覧会を開催せんとする秋に当り、真に奇縁の感を深くする。之を発見するや直ちに調査に着手したが、・・・今回漸くにして其由来の大略が明瞭になったことは誠に欣幸とする所である。

米国「ニューヨーク」市「イサカ」に在住の米国人「グリフィス」氏より、一片の手紙が左内先生の令弟なる男爵橋本綱常氏（当時宮内省御用掛）の許へ偶々到達した。それは西暦一九〇七年（明治四〇年）五月七日附けである。・・・その趣旨はかうである。それは綱常氏の令兄にして尊き勤王の志士、左内先生の事蹟の詳細を承知したい。自分は嘗て福井藩校の教師として短い期間在職し、其後東京にも暫く居住したが、先生の事に就てはその間多少知り得たに止まり、其後帰国したため何分東西隔絶、取調上困難を極むるにつき、御示教を賜り度、実は此頃日本に関

*大妻女子大学短期大学部名誉教授

する一書を刊行し、併せて先生の事蹟を世間に宣揚したき念願を有して居るとのことであった。

男爵がこの手紙に接した当年は、恰も先生の五十年祭挙行の一年前で、しかも景岳会に於ては『橋本左内全集』の編纂中である。そして其刊行に関する事務は、輔仁会の副会長である八田裕二郎氏が統理の任に当り尽力されている折柄なるを幸ひ、綱常男より右「グリフィス」氏に送るべき原稿の起草の周旋方を、同士に依頼する所があった。依て左内全集の校訂主任なる福田源三郎氏に託して、先づ『橋本左内略伝』の原文を作成せしめ、それを基にして、英文に翻訳せしめたのである。然るに右訳文は果して誰の手に成りしや今以て不明なれど、余り堪能でなかったものと見え、頗る不安を感じたから、更に同郷出身の岡倉由三郎氏に、神田駿河台の今立裕氏を介して、右訳文の斧正を委嘱することになった。岡倉氏は依頼に応じて、なるべく原文を害はぬ程度に之が改冊につとめた末、漸く前文の修正を了したから、八田氏は之を浄書に附して男爵に送り届けた。そして男爵より同年八月一日附けを以て前記「グリフィス」氏の許に郵送されたものであることが明白に判った。¹⁾

この解説は福井市長を務めた経歴をもつ歴史家永井環氏によるものであるが、これによりおもに福井関係者とくに景岳会（橋本左内顕彰会）の協力を得て和文と英文の左内略伝が作られ、グリフィスのもとに送られた詳しい経緯が判明した。すなわち、グリフィス→橋本綱常→八田裕二郎→福田源三郎→八田裕二郎→（英文：岡倉由三郎→八田裕二郎→）橋本綱常という複数の関係者の手を経て、グリフィスのもとに送り届けられたのである。そしてこのときの史料が、グリフィスの死後グリフィス・コレクションの一環としてラトガース大学に収められたものと考えられる。

本稿はこうした『橋本左内略伝』が作成されグリフィスのもとに送られた経緯を、内外の史料紹介をかねて実証しようとするものである。

1. グリフィスから橋本家への問合せ

まず紹介するのは、グリフィスが橋本綱常氏にあてた1907年（明治40）5月7日付の書簡である。これは先に紹介した『橋本左内先生 生誕百年記念 展覧会記要』に掲載されたものである。原文を確認することはできなかったが、明らかな誤植あるいは記述ミスと思われるものは訂正した。なお和訳は筆者（高木）が付したものである。

Ithaca, N. Y. May.7.1907

Baron T. Hashimoto.

Honored Sir.

Greetings and kind wishes. I address you as the brother of the noble patriot Sanai Hashimoto, of whom I have long wanted to know more. I lived in Fukui in educational service, from March 4, 1871 until January 27, 1872, and in Tokyo, until August 1874, and have spent much time since in America, in studying the history of the Japanese. I expect in Autumn to publish another book, showing the Aryan origin of the Japanese people, and their fitness to be the great middle term

between the Orient and the Occident. The book will be called "The Japanese Nation in Evolution."

Now, I have always thought that your honored brother had great ideas and hopes for his country, but I have been unable thus far to find out much about him. I shall be much obliged to you, if you will tell me something about his life and work. Please give me dates of his birth, and death, time of going to study, in Fukui and at Nagasaki and Yedo, with something of his work and purpose. Did he leave any writings? Was any biography of him published? Any posthumous honors granted him by the Emperor? Tell me something of his ancestors. Was he married or did he leave children? Who were some of his associates and fellow-workers?

Trusting that I do not give you too much trouble in thus inquiring about a noble patriot, of whom I want the world to know more, and with kindest regards and best wishes. I beg to remain,

Yours very truly,

Wm. Elliot Griffis. ²⁾

(訳)

橋本男爵殿

閣下

謹啓 お便りをさしあげますのは、かねてから詳しく知りたいと思っておりました高貴なる愛国者である橋本左内氏のご令弟としてであります。私はかつて教師として1871年の3月4日から1872年の1月27日まで福井に暮らし、その後1874年8月まで東京におりました。帰国後は多くの時間を費やして日本の歴史を学んでまいりました。私はこの秋にもう一冊本を出すつもりでおりますが、そのなかで日本人がアーリヤ人起源であることと、彼らこそが東洋と欧米のあいだを結ぶ仲介役として最適であることを示そうと思っております。本のタイトルは『進化の中の日本民族』となるでしょう。

このところ私はあなたの名誉ある令兄が自国に関して大きな理想と希望をもっていたとかねてより考えておりましたが、なにぶんかく遠方におりますので彼について多くを知ることができません。あなたから彼の生涯とその業績についてお教えいただけるならば、感謝にたえません。どうか彼の誕生そして死亡の日、福井・長崎・江戸で学んだ時期と勉学内容や目的についてお教え下さい。彼は何か著作は残していますか。何か彼の伝記は公刊されていますか。死後天皇から爵位は受けていますか。祖先についてわかることについてもお教え下さい。また結婚はしましたか、子供はいますか。どのような友人や支援者がいましたか。

高貴なる愛国者に関する私の質問があなたを煩わせないことを願っておりますが、世界の人々が彼についてもっと知ることを望んでおりますので、よろしくお願い申し上げます。

謹白

Wm. エリオット グリフィス

まさに橋本綱常氏の長兄にあたる橋本左内に関する調査依頼である。日本の歴史について本を書きたいと思っているので、左内の生涯、事蹟、交友関係や遺稿などについて教えて欲しいというのである。

なお橋本綱常氏の経歴について、ここで簡単に紹介しておこう。

1845年（弘化2）福井藩医橋本彦也長常の四男として生まれた。1855年（安政2）兄景岳が国事奔走のため藩医を免ぜられて御書院番に転じたのに伴い、一一歳で家職を継ぎ藩医となる。1862年（文久2）長崎に留学し、オランダ人シントレルに学び、ついで江戸に出て蘭方医松本良順の門に入る。帰藩後藩医として診療に従事したが、1865年（慶応元）長崎に再遊しボードウィンに師事した。翌年帰国し医学教授方を兼務、福井藩医学所済世館の改革に尽力し、戊辰戦争に際して組織的な野戦診療を展開して注目を集めた。維新後は十年間のドイツ留学を経て文部省御用兼勤東京帝国大学医学部教授を命ぜられ、わが国へドイツ医学を導入する道を作った。のち東京陸軍病院長・陸軍軍医総監・初代日赤病院長を歴任し、さらに貴族院議員・宮中顧問官を勤めた。1895年（明治28）医学界の重鎮として華族に列せられ男爵となり、1907年（明治40）には子爵に叙せられたが、09年（明治42）六五歳で亡くなった³⁾。

なおグリフィスは、左内の弟で綱常氏の兄にあたる橋本綱維とは福井滞在中親交があり、「ぼくの大好きな人」と国にあてた手紙に記しているほどであるが、この書簡が出されたとき（1902年）すでに綱維は没していた⁴⁾。グリフィス滞福中に当の綱常氏と交流があったかどうかは不明であるが、手紙の内容からはそうした気配は感じとれない。

2. 橋本綱常氏からグリフィス氏への返信 1

グリフィスの問合せに応えたのが次の橋本綱常からグリフィスにあてた1907年（明治40）6月5日付の書簡である。

Hirakawa cho 6 cho
Tokio
June 5th 1907

Dear Sir

I have received your kind letter of the 7th may 1907 and in reply I beg to say that some of my friends are at present preparing to publish the letters and writings of my brother Sanai, and they promised me to prepare Sanai's Sketch of life in order to comply your inquiries and it will be finished about the middle of next July. I shall then have it greatest pleasure to send you directly.

Thanking your esteemed sympathy upon my brother.

I remain

Yours obediently

Tsunatsuné Hashimoto

To

Wm. Elliot Griffis, Esqr.

Ithaca, N.Y.⁵⁾

内容は、現在左内に関する伝記編纂を担当している知り合いに依頼して、あなたのご依頼にこたえる内容の左内の略伝を七月中旬ころまでに書いてもらい、お送りするというものである。

先の永井氏の解説によれば、最終的にこの略伝（和文）作成の責任者は福井の歴史家で『越前人物志』の編者として知られる福田源三郎氏であった。

そしてこの英訳も作成し、英語学者岡倉由三郎氏に添削を依頼し、最終的に海軍出身の名士で『橋本左内全集』の編纂事務を統括していた八田裕二郎氏がこれを浄書に付し、原文の和文とともに橋本綱常氏がグリフィスのもとに『橋本左内略伝』を送付したのは、同年の8月1日のことであった。ちなみに岡倉由三郎氏は福井出身の英語学者として著名であるが、明治美術界をリードした岡倉天心の実弟で、その父岡倉覚右衛門はもと福井藩士であったこともあり、岡倉家と福井とのつながりは浅からぬものがあった⁶⁾。

3. 橋本綱常氏からグリフィス氏への返信 2

グリフィスのもとに送られた『橋本左内略伝』の浄書に同封された書簡が以下のものである。

Hirakawacho 6,cho

Tokyo

Aug. 1st 1907

Dear Sir

In compliance of my letter of the 5th July last, I have now pleasure herewith enclose the draft of my brother Sanai's sketch of life. The translator had a considerable difficulty to find correct words on exact expressions owing to his imperfect knowledge of the English. I wish you, Sir, in reproducing it in your work you will correct them and put it into a just style as you think fit.

Trusting that these will satisfy your requirements,

With best wish and

I remain

Yours very truly

Tsunatsuné Hashimoto ⁷⁾

ご依頼があった左内に関する略伝を送るが、英語力が不十分で翻訳がうまくいかないのが、適宜直して使ってほしいという内容である。

そしてこのとき送られた原稿が、現在ラトガース大学グリフィス・コレクションに収められたものであろう。以下、グリフィス・コレクションにある和文（Original）と英訳（Translation）を掲げる。いずれもこれまで紹介されたことのないものである。

4. 『橋本左内略伝』 和文

橋本左内ハ天保五年（紀元一八三四年）三月十一日越前福井常磐町ニ生ル。父名ハ長綱、通称彦也、俊爽ノ人、医ヲ以テ業トセリ。其ノ祖ハ足利氏ト同族ナル桃井氏ヨリ出ズ。母ハ真宗大谷派本願寺ノ末寺同国箕浦大行寺住職小林静境ノ女ニシテ賢良ナリ。左内人ト為リ警敏、幼ヨリ学ヲ好ミ、福井藩ノ儒者吉田東篁ニ就テ儒書及ヒ史籍ヲ講習セリ。長スルニ及ンデ学識大ニ進ミ品性大ニ備ハリ大志ヲ抱キテ寡言慎行、而モ事ヲ処スルヤ果敢人ニ接スルヤ謙讓、其ノ状貌白哲、其ノ軀幹短小、恰モ婦女子ノ如キ觀アリ。常ニ支那宋朝忠節ノ名士岳飛ノ人トナリヲ慕ヒテ自ラ景岳ト号セリ。而シテ医術ヲ兼ネ修メ、時ニ父ニ代リテ治療ヲ為シ、特ニ外科ニ達セリトイフ。蓋シ父ニ就テ学ヒタルモノナラン。十六歳慨然トシテ曰ハク、身僻郷ニ学モ到底短見タルヲ免レズ。宜シク大都ノ名家ニ就キテ知識ヲ開度スベシト。乃チ大阪ニ出デ、緒方洪庵ニ從テ西洋ノ医術ヲ学ベリ。十八歳父ノ病ヲ聞キテ国ニ歸リ十九歳父没セシカバ其ノ業ヲ襲キテ医員ニ列セリ。二十一才更ニ江戸ニ出デテ杉田成卿ノ門ニ入り蘭書ニヨリテ医術ヲ習フ。其ノ始成卿洋書一部ヲ与ヘテ習読セシム。彼日夜研究、孜々怠ラス。僅カニ一月ヲ以テ終了ス。成卿其ノ聡敏ニ驚キ試ミニ其書ヲ挙ゲテ之ニ問フヤ弁論流ル、カ如ク一ノ誤謬ナシ。成卿ノチ嘆シテ曰ハク能ク我業ヲ継ク者ハ必ス此ノ人ナラント。遊学中傍鹽谷宕陰及安井思軒等ノ門ニモ出入シテ儒学ノ研習ヲ為セリ。

二十二歳国ニ歸ル。藩主松平春嶽（慶永公）藩臣鈴木主税、中根鞆負等ノ推薦ニヨリテ其ノ偉器ヲ知り、医員ヲ免シテ再ヒ江戸ニ留学セシム。此間西洋ノ事情ヲ知悉スルト共ニ諸般ノ名士ニ交リテ見聞ヲ博クシ、志愈々大ニ識益々高マリ、私カニ経世ノ事ヲ以テ報効スル所アラシク期セリ。曾テ曰ク「人忠義ヲ重ンジ、士武道ヲ尚ブノ二条ハ我皇国神皇以来ノ国是ナリ・・・実ニ尚武ノ風ヲ忠実ノ心ニテ守ラハ、風俗敦重トナリ士道興起シ国勢国体万邦ニ卓出スルコト目前ニアリ。決シテ唐様ヲ慕フニ及ハス、又和蘭陀ヲ真似ルニ及ハス」ト。其ノ国体ヲ尊崇シ国風ヲ貴重シタルヤ見ルベシ。又曰ハク「凡ソ事ヲ行フニハ第一時勢ヲ料ルコト簡要ナリ。畢竟疾ハ疾ヨリ療法ヲ教フルト同様ニ、国家ヲ治ムルニハ国家ノ勢ヒ、衆人ノ情ヨリ治道ヲ指定スヘシ。恰モ是レ人ノ体力ト神氣トノ如シ。」而シテ治政ノ要ハ「第一君徳ノ輔養、第二士氣ノ維持、第三学校ノ施設、第四兵制ノ規律、第五貨財ノ量制ニシテ、此ノ五者ハ国家ノ大計、運祚ノ命脈ナリ」ト。皆時弊ニ適切ナルノ論策トス。

翌年藩主新ニ明道館ヲ興シ、左内ヲシテ幹事ノ重職ニ当ラシメント欲シテ帰国ノ命ヲ下サルルヤ、彼一たび辞スルニ猶十年諸学ヲ研究シ世態ヲ觀察シ、而ル後從來ノ恩遇一朝ニ報シ奉ルベシ、然レドモ若シ今ニ於テ国家ノ用ニ立ツコトアラハ如何ナル任シ難キ重責モ辞避セズ、臣子ノ職、国家ニ忠節ヲ尽スホド結構ノコトナシ、一身ノ利害ハ論スルニ足ラズト云ヒシガ、遂ニ再度ノ召名ニ応シテ国ニ歸リテ学監ノ任ニ就ケリ。然ルニ從來ノ学風ハ空理ニ走りテ实用ニ適セス彼乃チ文武兼ネ修メ仕学並ビ長ズルコトヲ方針トシ中根鞆負、村田巳三郎、長谷部甚平、石原甚十郎等心ヲ協セ以テ学政ノ改革ニ務メシカバ、一藩頓ニ興学ノ運ニ向ヘリ。而シテ最モ水戸ノ学風ニ依リ、其ノ学則モ概ネカノ弘道館ニ則リ其ノ主義モ亦忠孝無ニ文武不岐ニ依リ、殊ニ藤田東湖ノ所説ニ汲ム所多キガ如シ。而シテ別ニ一新機軸ヲ出ダシ、特ニ洋学ノ一課ヲ設ケテ兵法、算術、殖産等ヲ講究セシメ、更ニ汽船ヲ購ヒ、砲銃ヲ造リ、硝薬ヲ製シ、石炭ヲ鑿チ、又辺海ヲ測量シ各人材ヲ選ビ手其ノ事ニ任セシメ、専ラ国防ノ術ヲ講ジ、以テ他日ノ用ニ供セントセリ。ソノ他農業工業ノ奨励、商業道德ノ振作等ニツキテモ時

ニ建議スル所アリ。多種ノ方面ニ互リ奇警ニシテ周密ナル意見ヲ有シ、而モ力ノ及フ限り之レカ施設ヲ務メタリ。横井小楠招聘ノ事モ彼与リテカアリシナリ。

二十四歳藩主ノ召ニ応ジテ江戸ニ出テ、侍読トナリ兼ネテ枢務ニ参与セリ。此ニ於テカ藩主ヲ補佐シテ国事ニ鞅掌スルコト、ナレリ。是ヨリ先キ米国使節ベルリ浦賀ニ来リテ通商ヲ求ムルヤ海内騒然、殊ニ朝旨幕議動モスレハ相抵牾シ事態穩ナラザルモノアリキ。当時將軍徳川家定公多病ニシテ嗣ナシ。各藩有志ノ徒相與ニ協議シ、一橋慶喜公英オアリ中外望ヲ屬スルヲ以テ推シテ儲式トナシ遂ニ外国条約及ヒ開港等ノ事ヲ正スヘク、又朝廷ト幕府トノ協和ヲ計リ併セテ衆議ヲ容レテ幕府ノ専断ニ委スヘカラスト為セリ。藩主春嶽、水戸徳川景山（烈公）土佐山内容堂等ノ諸侯ト共ニ極力はヲ主張シ、左内モ亦水戸ノ武田耕雲齋、原田八兵衛、同誠之助、櫻任蔵、薩摩ノ西郷吉兵衛（隆盛）、堀仲左衛門、土佐ノ小南次郎右衛門、柳川ノ立花壱岐、其他幕吏土岐丹波守頼旨、永井玄蕃守尚志、岩瀬忠震、儒者藤森弘庵等ト共ニ最モ是ニ尽瘁シテ陰ニ陽ニ周旋至ラサル所ナシ。嘗テ内治ノ事ニ関シテ曰ハク、先ヅ慶喜公ヲ以テ儲式ト為シテ根本ヲ固ムルト共ニ、諸藩賢明ノ侯伯ヲ挙ゲテ部署ヲ分チテ各行政ノ要路ニ当リ、其下ニ天下ノ俊傑ヲ集メテ以テ諸般ノ経営ヲ為スヘシ。水戸老公、薩摩公又ハ春嶽公ヲ国内事務宰相トシ、而シテ川路聖謨、永井尚志、岩瀬忠震、其他各藩ノ名士輔翼タルヘシ、又尾張公、因幡公ヲ京都ノ守護職トシ、井伊侯、戸田侯ヲ其ノ副トスベク、更ニ蝦夷ニハ伊達侯、遠州侯、土佐侯ナドヲ派遣スベシト。即チ内閣組織ノ如キ意見ヲ有シタル者ナリ。且ツ一時ニ魯西亜、亜墨利加ヨリ諸芸術ノ師役五十人ヲ傭聘シテ盛ニ西洋ノ知識ヲ移シ、海陸軍ノ兵器、兵術ヲ始メ航運、産業、學術、開拓ノ事、西洋諸国ニ拮抗シ得ルマテニ至ラシメサルヘカラストナセリ。又外交ニ関シテ曰ハク方今世界ノ大勢ヲ觀察スルニ将来覇ヲ唱フルモノ恐ラクハ英ニアラスンハ魯ナルベシ。而モ此ノ二国ハ両雄並立セザルモノナリ。日本ハ本ト蕞爾タル一小国ナレハ、其ノ孰レカニ同盟セスンハ将来ノ發達ハ勿論、存立モ覺束ナキモノナリ。然ルニ英ハ貪戾飽クコトヲ知ラズ。現ニ印度ヲ略シ支那ヲ嚇カセリ。到底組スヘキニアラス。之ニ反シテ魯ハ沈鸞巖正ニシテ信アリ、我ト隣国ナリ、唇齒ノ国ナリ。是レ最モ親交スヘキナリ。此ニ於テカ英ハ必ス戦ヲ挑ムヘシ。是レムシロ我国發展ノ好機ヲ与フルモノ潔ク魯トノ同盟ニヨリテ開戦シ、然ル後天下ヲ処理スヘシ。兎ニ角真ノ独立ヲ為サンニハ朝鮮、満州、山丹ヲ占領シ、且ツ印度及亜米利加ニ殖民地ヲ有セサルベカラズ。此ノ如クシテ後世界ニ一芝居ヲ為シウベシト論ゼリ。

而シテ其等ノ内治外交ノ事ヲ処決スルヤ第一着ニ英明ナル慶喜公ヲ儲式ト為シ、將軍ノ職權ヲ代行ハシムヘシトシ、二十五歳ノ春京都ニ入り、先ツ内大臣三條実萬公ニ謁シ、次テ青蓮院親王ニ候シ更ニ太閤鷹司政通公、左大臣近衛忠熙公ニ謁シ、且ツ太閤ノ侍読三国大学、内大臣大夫森寺因州同若州執事小林良典等ノ協力ヲ得テ、一ハ慶喜公儲式タルヘキノ勅旨ヲ下シタマフコトヲ請願シ、一ハ条約ヲ結ビ貿易ヲ開クコトハ皆宜シク朝命ヲ獲テ之レヲ行フベキコトヲ誓約シ、時ニハ流言ヲ放チ、時ニハ間諜ヲ用ヒ切スラ之レカ成就ヲ図レリ。居ルコト三ヶ月余ニシテ江戸ニ帰り、又種々尽策スル所アリ。殆ンド寢食ヲ忘ル、ニ至レリ。然レトモ幕府大老井伊直弼群議ヲ排シ、更ニ朝命ヲ拒ミテ紀伊徳川慶福ヲ立テ、且ツ着々開国ノ事ヲ断行ス。七月將軍家定薨スルヤ紀伊卿入りテ大統ヲ継キ家茂ト称ス。幾許モナク尾水土越ノ四侯ヲ譴責シテ各邸ニ閉居セシム。且ツ大ニ志士ヲ捕縛ス。左内累其君ニ及ヘルヲ恐レテ自刃セント欲ス。春嶽公懇ニ之ヲ諭セシカハ、乃チ止ム。十月二日夜幕吏来リテ其

ノ寓居ヲ搜索シ、文稿及ヒ書牘ヲ収メ去ル。翌日市尹石谷因幡ノ序ニ召サレ、藩邸ニ禁固セラル。其後糾問数回、安政六年十月二日獄ニ下サル。

著書ニ「啓発録」一卷、「黎園遺草」二卷アリ。前者ハ十四五歳ノ時ノ作ニ係リ、去稚心、振気、立志、勉学、択友交ノ五目ニ就キ主ニ士道ノ大要ヲ講述シタルモノニシテ、忠孝節義ノ言、悲憤激勵気、人ヲシテ共ニ精熟決シテ尋常青年ノ企及スヘキ所ニアラサルナリ。後者ハ漢詩ヲ集メタルモノニシテ、遺弟綱維、綱常二氏ノ論纂シタルモノ、雄奇豪快、憂世ノ意言表ニ溢レ、詠ム者ヲシテ其ノ気節ヲ想ハシムルニ足レリ。

未ダ刊行セサルモノニハ黎園遺稿三卷ノ外、外国貿易、教学、産業、政治等ニ関スル建白書、意見書、報告書ヲ始メ館務私記、諸事彙纂、蘭書翻訳、漢文集等数多アリ、尚母堂並交友等ニ贈リタル書簡類ノ中最モ見ルヘキモノアリ。六七尺以上ノ長キニ至モノ少カラス。殆ント彼ノ著書見ルヘク文章流麗、筆力雄渾、彼ノ心血ヲ灑キタルノ跡歴々睹ルヘシ。此等ハスベテ橋本左内全集トシテ本年十月東京書肆吉川弘文館ヨリ出版スヘシ。

又伝記トシテハ春嶽公カ彼肖像ノ上ニ記セラレタル一文ヲ始メ、維新史料ニ載録セルモノ、文学博士重野安繹氏ノ碑文、岡本監輔ノ日本中興先学志中ノ橋本左内伝アリ。一冊トシテ著ハサレタルモノニハ、唯法学士桐生政治ノ「橋本左内」(博文館発行)アルノミ。但シ新聞ニハ長野日々新聞ニ凡ソ百回ニ亘リテ北村紫山ノ作レルモノヲ見タリ。左内婚セス、子ナシ。家断絶ス。明治四年朝命ニ依リ、次弟綱維承ク。又没ス。季弟綱常ノ三子綱規嗣ク。綱常ハ明治二十七八年戦役ノ功ニヨリ男爵ニ叙セラレ、任ハ陸軍軍医総監、宮中顧問官タリ。又宮内省侍医ヲ兼ネ、且ツ日本赤十字社病院長ノ職ヲ帯ブ。

明治十一年天皇北陸道巡行ノ砌り福井ニ至リ、君カ王事ニ勤勞シタルヲ褒シ、其ノ親族ヲ召シテ祭祀金若干ヲ賜ハリ、十八年紀念碑ヲ東京府下南千住小塚原ニ建ツルノ際、金壹百円ヲ下賜セラル。二十四年特ニ其ノ功勞ヲ賞シタマヒテ四位ヲ追贈セラル。死シテ余榮アリトイフベシ。墳墓ハ福井祐海町善慶寺橋本家先塋ノ境域ニアリ。景岳先生墓ト標記ス。黎園墓ト標称スルモノ小塚原ノ旧地骨地ニ在リ。其傍ニ太政大臣三條実美篆額、文学博士重野安繹撰、巖谷一六書ノ紀念碑ヲ立ツ。

明年ハ其ノ横死ヲ去ルコト正ニ五十年、有志相計リ東京並福井ニ於テ盛大ナル祭典ヲ挙行シ、以テ其遺靈ヲ慰メ、併セテ其功德ヲ後世ニ知ラシメント欲ス。⁸⁾

この記述内容をみると、依頼を受けた日本側がグリフィスの照会事項に対して忠実に答えようとしていることがよくわかる。

5. 『橋本左内略伝』英訳

A SKETCH OF THE LIFE OF HASHIMOTO SANAI

HASHIMOTO SANAI was born in a place called Tokiwa-cho in the city of Fukui, Echizen, on the

11th day of the 5th (3rd) month in the 5th year of Tenpō (1834). His father Gen-ya by name was a physician to the court of lord Echizen and was said to be strong personality. His ancestors belonged to the Momonoifamily near relation of the famous Ashikaga family. His mother was a daughter of Rev.Kobayashi Seikyo, rector of Daigyoji at Minoura which was a branch of the Shin sect.

Sanai was by nature clever and loved learning. He studied the chinese classics and history under Yoshida Tokō a scholar of the Fukui clan. As he grew up his knowledge made a steady progress and his powerful mind developed itself with wonderful rapidity. He had some gigantic plan in his mind but taciturnity and modesty were the commanding features of his character. He carried out his principle with decision although he was very courteous in his daily intercourse. His countenance was fair and was of a short stature, looking more like a young woman. His admiration of the personality of Gak-hi (ah-pi) the chinese patriot of the SŌ (Sung) dynasty made him assume the nom de plume Kei-Gaku (i.e. Ah-pi admirer). He studied medicine and often practised it in place of his father although very young. He is said to have been skilled in surgical operations, his father being in all probability his sole teacher.

When sixteen years old, one day he said, in a anxious manner, "If I continue studying in this remoted corner of Japan, I shall not be able to free myself from the narrow views incidental to the rural surroundings. I ought study under a noted person in one of the principal town in Japan." So coming to Ōsaka, he studied under Ogata-Kōan, a famous scholar of Dutch language and a physician. At the age of eighteen, he was obliged to return to Fukui on account of his father's illness and the following year he had to succeed his father's profession upon his death. At the age of 21 he came to Yedo and was studying under Sugita-Seikei (noted Dutch scholar and an physician). When he met Seikei first, Seikei gave him a Dutch book to be learned by heart. He studied it very hard and learned it all in a month's time. When Seikei asked him several questions about the things described in the book, he was found well versed every details without making a single mistake. Seikei, taken by surprise, said that he will be his successor. He also studied the chinese classics at the school of Shionoya-Tōin and Yasui-Sokken , at the age of 22 he returned to Fukui.

Matsu-daira Shungaku the lord of his clan came to know him through Suzuki-Chikara and Nakané-Yukié and sent him again to Yedo to complete his study, he being freed from the obligation as the court physician. During this period he acquired a complete knowledge of foreign (European) countries and associating with notorious persons of the time.

He deepened his knowledge and experience, becoming now conscious of a mightier purpose than was hitherto the case with him, he made up his mind to sacrifice himself for the sake of his country. Once he said "To think highly of the loyalty and the manners of the Samurai have been the two principles of our state since the ancient times. If we remain in faithful to the Samurai Customs, it is evident that the manners of the people will become pure and simple and the sole of the Samurai will be developed, and the condition of this country will become superior to those of

any other countries. We need not adopt the ways of china nor imitate the manners of Dutchmen (European).” We can see from this how he esteemed the native state of things in Japan. Again he said, “To achieve a thing it is necessary to think about the tendency of the age in fact as it is as in a disease itself that point us out the nature of a medical treatment so it is needful to know that we should be versed with the existing conditions of the country and the feeling of the people in order to govern the country.”

He enumerate the essential conditions of administration as follows.

- (1) The culture of the virtue on the part of the ruler.
- (2) The preservation of the spirit of Samurai.
- (3) The establishment of schools of science.
- (4) The regulations for military system.
- (5) Reformation of the system of current coin.

“Those five conditions” be thought, are principle parts of the administrations and keystone of the prosperity for the state.

All his opinions were right and indispensable as so many cures for the wrongs of the age.

Next year the lord of Echizen established the academy called Meidōkwan and persuaded Sanai to return to Fukui. The lord wished to employ him as manager of the establishment, but he declined the offer and expressed his opinion “I wish to study several branches of science and philosophy for ten years and observe the state of the world. After that I will requite the favour of your lordship, but if your lordship wants me now, I will not evade the duty, no matter how difficult it may be. It is honorable to do offices for the sake of the state and I do not care about my own conveniences.” Nevertheless the lord insisted upon his returning to Fukui. So he obeyed the order and was entrusted with the office of the superintendent of the students. But the students of these days were prone to the discussion of things and neglected the practical solution of them. So he announced that the students should study literature and at the same time practice the military art. Together with Honda Shuri, Nakane Yukué, Murata Misaburō, and Hasebe Jinpei, he devoted himself to the reformation of the educational system.

The love of learning was promptly aroused all over Echizen, he took the academy of Mito clan (Kōdōkwan) as his model and adopted some of the regulations belonging to it. The principles of the academy were those based on loyalty and obedience after the opinion of Fujuta Tōko. He originated in addition to the above the course of European learning in the academy, mathematic, industrial art, military art were studied there. In accordance with his plan a steamship was purchased, small arm and gun making commenced the gun power manufactured and mining put into operation and the seacoast of Echizen was surveyed. He caused every branch of these business attended by proper persons and studied of the defense of the country. He encouraged industry and agriculture and expressed his opinion about the promotion of commercial moral. He entertained

opinion at once original and well-founded and he tried to put these into the practice. He made best to see Yokoi Shonan properly employed in the clan.

At the age of 24, summoned by the lord, he went to Yedo. He was appointed as the personal attaché to the lord and came to partake the affair of the state. From this time he had a hand in the affair of the clan government and assisted the lord. A little before this Commodore Perry came to Uraga and demanded the opening the ports. There followed bustle in every part of Japan and opinions of Tokugawa Shogunate government at Yedo and that of the Imperial court at Kyoto in variance.

At that time Tokugawa Syogun Iésada was seriously ill and had no successor. Some noted persons from every clan consulted together and came to the conclusion that the prince Hitotsubashi Keiki should be adopted as to the successor of the Shogun for he was very clever and popular among the Japanese, they thus tried to settle the important questions of Foreign treatise and to compromise between the Kyoto court and the Yedo government. The Shogunate they thought should not left alone to go his own way, and as his lord Shungaku. Keizan the lord of Mito and Yōdō the lord of Tosa insisted upon of solving the question in this form. Sanai with Takeda Kōunsai, Harada Hachibei, Harada Seinosin, Sakura Jinzo, of Mito, Saigō Kichibei (Takamori), Hori Chūzaémon, of Satsuma, Kominami Jirōémon, of Tosa, Tachibana Iki of Yanagawa and Toki Tanba, Nagai Genba, Iwase Tadanari, Fujimori Kōan and others made the best in his power to bring the matter to this conclusion.

Once he expressed his opinion about the internal affairs. "First of all we must adopt Prince Keiki as successor to the Tokugawa Syogun and then get the wisest of the feudal lords stationed each at the head of the departments in most important in the state administration. The lord of Mito or of Satsuma or of Echizen should be the prime minister of the state. Nabeshima Kansō, the lord of Hizen should become minister for foreign affairs, Kawai, Nagai, Iwasé and other prominent persons should be their assistants, the lord of Owari, lord of Inaba should be the governor of Kyoto, marquis Ii, marquis Toda should be the vice governor, for Ezo (Hokkaido), we should send such persons as the lord of Sendai, lord of Enshū, the lord of Tosa." From these words it is clear that he entertained an idea somewhat resembling the formation of a ministerial government. Again he said, "Japan should hire 50 teachers in every branch of arts and sciences from Russia and America and ought transplant foreign knowledge, thus in military and naval matters, navigation, commerce, industry, plantation & c we must not be inferior to Foreign Countries."

As to the foreign intercourse his opinion was, "In viewing the present state of the world, the country which will gain the supremacy over the world will in all probability either England or Russia, those two countries can not continue ever long in an amicable relation. Japan is a small country compared with these powers, if our country does not ally with one of these powers we can not count upon the future prosperity, nay probably will not be able to maintain out in dependency.

England is very avaricious, she has annexed India and threatened china on the other hand Russia seems righteous and honest, it is our good neighbour with much the same interest as ours, we must form a close intercourse with Russia. If we allied with Russia, England would challenge war against us, and that would give us an opportunity of development of our state, we will declare war against England in corporation with Russia.” After all to hold the independency, we must take possession of corea, Manchuria and shantan, above all we must have settlement in India and America. Thus then we can take a part in the drama of the world, in order to carry out these plans it was necessary to place Prince Keiki in the office of the Shogun.

In the spring of 25 years of his age Sanai went to Kyōto and had a secret interviews with Prince Sanjo Sanemitsu, then he presented himself to his Highness Prince Seirenin, Takatsukasa Masamichi, Konoé Tadahiro, by the aid of Mikuni Daigaku, Moridera Inshū, and Kobayashi Riōten, he sent in a petition that the Kyōto court should issue a decree that Prince Keiki to succeed the Shogun and to conclude the treaties with the foreign countries, endeavoring to succeed his aim he stayed 3 month in Kyōto and returned to Yedo there to devote himself for national cause with more vigour.

In the meantime Ii Kamonnokami (Naosuké) premier of the Shogunate Government disdaining all other opinions, opposed the order of the Kyoto court and adopted Prince of Kishū, Tokugawa Iyēsada died and the said Prince Kishū succeeded and in called Shōgun Iémochi, this Shōgun with the advice of Ii Kamonnokami (the premier) severely reprimanded the four famous lords of Owari, Mito, Tosa and Echizen and imprisoned them in their own residences, many patriotic Samurai were arrested. Sanai knew that he will come to the same fate and determined to commit suicide, but by the admonition of his lord Shungaku, he refrained from doing so. At night on the 2nd of October the policemen of the Shogun government searched his house and took possession of all his writings and letters, the following day he was summoned to the law court and was put into prison.

He was put to death on the 7th of October 1859.

His works are Keihatsuroku and Reieniso, the former he wrote when he was only fifteen years old, in this works we find the “Five Topics” i.e. (1) The getting rid of childishness, (2) The fixture of aim, (3) Studying vigorously, (4) Choice of friends, (5) The rousing the spirit, were fully discussed in the book which aim at a sketch of Bushido, we can not help admiring the refined style mature thoughts expressed therein.

The latter work is a collection of his chinese poems, compiled by his brothers Tsunatsugu and Tsunatsuné, sublimity and patriotic spirit fills up the pages. Among the works not yet published there are petitions about foreign trade, and on education, on agriculture, and on administration, reports, and essays. Among the rest are Kwanmu-shiki, Shoji-isan, “Uersameling van onders cheidene Dinger” and translations from Dutch. There are letters addressed to his mother and his friends. Some of them reaches almost to the length of 9 or 10 feet long and are very graceful in

style. These works will be published in the “Complete works of Hashimoto Sanai” now in press at Yoshikawa Kōbunkwan a book-seller in Tokyo.

As to his biography there are a composition written above his portrait by lord Shungaku and an epitaph by professor Shigeno Anshaku.

In “Nippon Chūkō Senkaku shi” there is short sketch of the life of Sanai by Okamoto Kansuke there is a work called “The life of Hashimoto Sanai” by Kriu Masaji. In the Nagano daily news Kitamura Shizan wrote a long essays on Sanai.

Sanai did not marry, at the 2nd year of Meiji his 2nd brother Tsumatsugu succeeded the family but he died so a son of Baron Tsunatsuné (Sanai’s 3rd brother) has succeeded Sanai’s family. Baron Tsunatsuné Hashimoto is the youngest brother of Sanai and was created the Baronetcy through his services as Surgeon-General of the army and a member of the court council and the honorary physician to the Imperial household principally attached to H.I.H. the Crown Prince and the president of the Hospital of Japan Red Cross Society.

In the 11th year of Meiji, when H.M. the Emperor made a journey to the provinces of Hokuriku, the Emperor stopped at Fukui the birth place of Sanai. The relatives of Sanai were received in audience and received a donation towards the expenses of the anniversary. In the 18th year of Meiji when a monument was elected at Kotsukappara, Senju, Tokyo, the Emperor gave a donation one hundred yen. In the 24th year of Meiji the Senior Forth Grade of court honor was conferred on the deceased patriot.

The 50th anniversary of his death were be celebrated at Tokyo and Fukui next year (1908).⁹⁾

これによって得られた情報に基づいてグリフィスは左内に関する執筆用のメモ一枚を作っていたことがグリフィス・コレクションに残された史料から判明するが、彼が橋本綱常氏に書き送っていた“The Japanese Nation in Evolution”の公刊は結局実現せず、したがって福井側が期待していたようなかたちで『橋本左内略伝』がグリフィスによって活用されることはなかった。

なお付言しておけば、グリフィスはこうした歴史上の人物に関する照会状を日本の多くの知人や関係者に送って情報を求めており、特に橋本左内だけを重視していたわけではない。そしてこうして集められた様々な日本関係史料がグリフィス・コレクションの重要な構成要素になっているのである。

結びに代えて

以上が史料から確認しうる『橋本左内略伝』が書かれ、グリフィスのもとにおくられた経緯であるが、この史料に関して筆者が気づいた点をいくつか指摘して結びに代えたい。

1) 英訳は橋本氏が指摘しているとおり、かなり読みにくいものになっている。綴りのミスも多く、また文章の区切りが少なく、長々とコンマでつなげてあり、流れがわかりにくい。

内容を見てみると、興味深いのは英訳文では China や Chinese と記すべきところが china、chinese と頭文字が小文字になっていることである。それに対して Samurai や Bushido の頭文字が大

文字になっている。これは単純なミスではなく、背後に日清戦争（1894・95）後の「中国」に対するさげすみの気持ちがあり、逆に日本の「サムライ」や「武士道」には誇大なプライドをもっていたことをうかがわせるものとなっている。

2) またグリフィス・コレクション所収の『橋本左内略伝』の英文（1907）と、『橋本左内先生生誕百年記念 展覧会記要』に載っている英文（1939）との間にも少なからぬ異同が見られる。後者は読みやすくかつ分かりやすく改善されていることからして、生誕百年記念展覧会に向けて岡倉由三郎氏が後日改めて斧鉞をおこなったものと推測される。

しかし後者の英文も、和文の原文あるいはグリフィス・コレクションの英訳と乖離した表記が見られる。たとえば原文では、

Japan should hire 50 teachers in every branch of arts and sciences from Russia and America. として「ロシアやアメリカから科学技術のさまざまな分野の五十人の教師を招き、新知識を学ぶべし」という左内の主張が忠実に記されているが、このロシアという国名が後者では次のように省略されている¹⁰⁾。

Japan should engage 50 teachers in every branch of arts and sciences from America. ここにも日露戦争（1904・05）・ロシア革命（1917）を経たのちの、当時のソ連（旧ロシア）に対する警戒心と対抗心という時代認識が反映されているとみることができるのではなかろうか。

3) 綴りについては、米国流ではない英国流の古い英語表記が用いられている。例えば原文では neighbor は neighbour、favor が favour などと記されている。このことは20世紀初頭の日本の英学事情を知る一つの手がかりになるであろう。

注

- 1) 『橋本左内先生 生誕百年記念 展覧会記要』（景岳会、三秀舎、1939）92 - 94頁。なおこの史料の存在については、福井のグリフィス研究者である山下英一氏から教示を受けた。
- 2) 同上、95頁。
- 3) 『越前人物志』（福田源三郎、思文閣、1909）、『福井県医学史』（福井県医師会、1968）。
- 4) 山下英一『グリフィス福井書簡』（能登印刷出版部、2009）、185頁。
- 5) ラトガース大学アレクサンダー図書館グリフィス・コレクション、GROUP1 Series: CORRESPONDENCE - JAPAN LETTERS. Hashimoto Tsunatsune 1907。
- 6) 岡倉覚右衛門は藩命で幕末開港後の横浜に出て制産方の役人として福井藩の横浜商館石川屋の経営に関与していたが、のち商人となり生糸商石川屋金右衛門として名実ともに石川屋を経営していた（高木不二『横井小楠と松平春嶽』吉川弘文館、2005参照）。
- 7) 5) に同じ。
- 8) 同上、なお活字化に際して旧漢字は新漢字にあらため、句読点は適宜付加した。
- 9) 同上、なお原文はきわめて読みにくい文体になっているが、本稿では明らかな綴りのミスのみ修正し、文と文のつながりなどについてはそのまま表記した。
- 10) 『橋本左内先生 生誕百年記念 展覧会記要』99頁。